学校だより
庭の桜の はなもみじ №61
平成23年3月2日
屋代小学校
春秋ごとに匂うなり

# 引き継ぎのとき ～ 卒業する喜びと誇りを／卒業生への感謝を ～

３学期も残すところ、あと２週間。ここまで大きな事故もなかったことに感謝し、卒業・進学、進級に向け、落ち着いた生活をつくり出しましょう。

## 新児童会発足

２月28日（月）には、４・５年生による新児童会が発足し、１日（火）から、新しい委員による当番活動が始まりました。新正副委員長・書記の三役の皆さんは、さぞかし緊張したことでしょう。この責任感を、自分を成長させるエネルギーに変え、最高学年への進級の準備をしてください。

図書委員会

## 卒業式歌練習

１日（火）より、全校での卒業式の歌練習が始まりました。卒業式の歌が聞こえてくると、学校は物悲しい雰囲気になってきます。心のこもった卒業式で卒業生を送り出せるように、背筋を伸ばし、おなかにしっかりと力を入れて、歌いたいものです。名残を惜しみながらの緊張した練習でした。

全校音楽

## 新登校班決定

新登校班が組織され、正副班長を対象に登校時の並び方、歩き方、横断歩道の渡り方等の指導がありました。４日（金）より、新しい班での登校が始まります。新１年生が入学してくる前に、手本となる登校方法を身につけましょう。お家の方々も「気をつけて」と一言添えて送り出してください。

正副班長指導

卒業生は、６年間の課程を修了し、卒業することとなります。自分自身の６年間の努力と成長を振り返り、喜びを感じてください。そして、歴史ある屋代小学校の卒業生に名前を刻むことに、誇りをもってください。

在校生は、６年生にお世話になったことを思い出し、感謝の気持ちをもちましょう。そして、６年生のがんばりを目に焼き付け、後輩に引き継いでいくことのできるように、責任の重さを感じ、努力を続けましょう。

百里を行く者は九十九里をもって半ばとせよとの諺があります。残りわずかな日々を大切にする人こそ、新たな一歩が踏み出せると思います。

# 続々　キラリ輝くこの子のために(27)

**自分の番　いのちのバトン**

**相田みつを**

父と母で二人
父と母の両親で四人
そのまた両親で八人
こうしてかぞえてゆくと
十代前で、千二十四人
二十代前では――？
なんと、百万人を超すんです。

過去無量の
いのちのバトンを
受けついで
いま、ここに
自分の番を生きている
それがあなたのいのちです。
それがわたしのいのちです。

書家で「いのちの詩人」とも呼ばれている相田みつをさんの詩です。

２５歳で子どもを産んだとすると、１０代前は２５０年前。１７６０年ころは、江戸時代中期。徳川吉宗、田沼意次、杉田玄白、平賀源内等が活躍していた時代だそうです。

２０代前は５００年前。足利氏による室町幕府も終わりに近づき、戦国時代になるころです。

そんな昔に、自分の命にかかわる人がそんなに大勢いることに、改めて驚きます。

- **自分の生命は、過去の祖先からの受け継いできたものであること**
- **自分の生命は、未来の人に受け継いでいかなければならないこと**

等、大切なことに気づかされます。

過去、どこかでバトンが渡されなかったならば、今とそっくり同じ自分はいないはずです。数え切れない人々がバトンをつなげてきてくれたからこそある今の自分の命。その間の命に、重い命と軽い命、よい命と悪い命など、違いがあるはずはありません。全部が輝く、なくてはならない大切な命なのです。この「キラリ輝くこの子のために」は、子どもによって、優れた子とそうではない子がいるのでなく、一人ひとりが大切な命を輝かせなければならないという思いで書いてきたものです。

リレーで、自分が「バトン」をもらったら、どんなことに気をつけますか？

だれもが、バトンを落とさないようにしっかりと握り締め、一生懸命走るでしょう。自分だけのものでない命に感謝し、次の命につなげるために、精一杯生きているのが、今の私たちです。

そして、自分の生命と同じように他人の生命を大切に思い、自分の「いのち」のありがたさ、生きていることのすばらしさを感じていきたいものです。